

<b>Title</b>	青年のメンタルヘルスと教会
<b>Author(s)</b>	平山, 正実
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学 : 論集, Volume23, 2008.3 : 22-56
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=3243">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=3243</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 青年のメンタルヘルスと教会

平山正実

### 一、はじめに

現代の若者のメンタルヘルスについて考える際に、その背景というものを探っていくと、フリーター五〇〇万人<sup>①</sup>、ニート六四万人<sup>②</sup>、それに毎年二〇万人の若者が、ニートやフリーターの予備軍として、産み出されるという事実が、浮かび上がってくる。また、いつまでたっても、親から自立できないというパラサイト人間も増えているという。さらに、近年、不登校者や被虐待児が増え、自殺者も、毎年三万人に高止りしたままである（二〇〇七年現在）。

大人達は、そのような若者に対して、「甘えている」とか「怠けている」とか「情けない奴だ」と批判するか、「もう大人になったのだから勝手にしろ」と投げやりな態度でしか対応しようとしない。このような社会状況の中にあつて、家庭や学校や社会から脱落し、引きこもってしまった青年達に教会人は何をすべきか、また何ができるか、その対応が問われている。筆者は精神医であり教会に属する者として、このような課題に答えるべく本稿を執筆した。

## 二、若者はどんなことに悩んでいるのか

筆者は、前任校で学生相談室に所属し、青年達のメンタルヘルスに関する問題にかかわってきた。このときの経験を踏まえ、現代の若者は一体どんなことに悩んでいるのかということをもとめてみたい。

第一に、対人関係に関する相談がある。大学に入ってきたものの、「他の学生とうまくやっていけない」「友達を作れない」と訴えてくる学生が意外と多い。よく聞いてみると、彼らの自我は、脆弱で、いつも他人の前に出ると過敏に反応し、緊張と不安に怯え、ささいな事柄に傷ついてしまう。かれらが共通して訴えるのは、「自分は、嫌われているのではないか」「飽きられるのではないか」「見捨てられるのではないか」「軽んじられるのではないか」といった恐れである。このような彼らの気持ちをまとめてみると、他者からの見捨てられ不安といってよいのではないだろうか。また、彼らは、他者と打ち解け合えない、人の中に入っていきたいが入っていけない、人とかかわりたいけれどもかわれないという。

第二に、かれらは自分は性格的に弱い人間であると認識し、苦しんでいるように思えた。そして、このような性格的弱さを防衛しようとして、他者に甘えたり、演技し操作しようしたり、依存したり支配しようとする。そのために、相手からも嫌われ、見捨てられてしまう。その結果として、ますます、自分の殻の中に引きこもるか、意識を解離することで自分を守ろうとするか、さもないければ過剰反応しようとするか、さまざまな自傷、他害的言行に悩むことになる。

第三は、自立の問題あるいは自己同一性をめぐる悩みを訴える青年たちがいる。大学に入っても、何をやったら

よいのか、将来なにをすべきかということが全くわかっていない若者が多い。このような若者を、過去にモラトリウム人間と言った精神科医もいた。たしかに、大学時代は、社会人ではないから、モラトリウムという期間に該当するといえるだろう。試験や授業出席という枠はあるが、クビになつて失業するわけではないので、病氣という範疇には入らないものの、自己のアイデンティティ（自己同一性）がはつきりせず、「自分探し」をしている学生は、かなり沢山いるのではないかという印象を受ける。彼らは、「自分の興味があるものが見つからない」「やりたいことはあるが、自分の能力とは、折り合いがつかない」と訴える。このような彼らの心の悩みをよく聞いていくと、かれらが深い孤独感と虚無感をもっていることに気づく。

第四に家族問題を挙げることができる。家族問題で悩む学生の多くが、いわゆる崩壊家庭の子供達である。彼らの多くは、両親の別居、離婚、不倫、破産、死別、親権をめぐる争い等に巻き込まれ、傷ついている。つまり、祖父母や親、親族同士の葛藤が、青年の心に暗い影を落としている。中には、親や祖父母が身体疾患やアルコール依存、統合失調症、人格障害等の精神病に罹患していて、そのことが家族葛藤をもたらし心の傷になつていくケースもある。とくに、夫婦間葛藤に巻き込まれ、子どもが無理をして、よい子を演じ両親のとりなし役になろうとして失敗し、精神的に破綻する例もある。

### 三、青年の未熟性について

前任校の学生相談室に來所した青年達の特徴を、著者なりにひとことで言うならば、「未熟性」というキーワードでまとめることができるように思う。もしも、このような自立できない未熟な青年達が増えるとするれば、日本の将

来は危ない。

今後、少子化が加速し、高齢者が増えることが予想される。本来、高齢者は、若者が支えなければならぬはずだ。その青年達が、支えられる側に回るとしたら、それこそ事態は深刻であると言わなければならない。

次に、精神的に未熟な青年の自己意識についてまとめておきたい。彼らに接していると、しばしば「空しい」「心の中が空っぽになったみたいだ」「淋しい」などと訴える。また「自分がなくなったみたいだ」と言う青年も少なくない。

また、「自分の存在価値が見出せない」「自分は、一体何者なのか」「自分はどこからきて、どこに行くのか」「自分は何をすべきか、どう生きていったらよいかわからない」と述べる。このような問いは、精神の未熟性を表わす自己同一性の欠如を示す指標である。

未熟な青年の自己意識の中核には、このような空虚感と見捨てられ感がある。そして、この空虚感と見捨てられ感のゆえに、彼らの自己同一性は確立されないし、その空虚感と見捨てられ感を防衛するために、自らが全能感をもつたのごとく振舞う自己中心的態度が目立つ。

彼らのもつ全能感とはどのような感情を指すのであろうか。かれらは、なんでも自分の思い通りになるといった万能感や優越感をもっている。このことを別の言葉で言えば、「自分中心に世界が回っている」といった考えであるといえる。このような思考は、決して現実にしつかりと根を下ろした根拠のあるものではなく、あくまで空想の世界への囚われである。フロイトは、未熟で幼児的な自己愛を断ち切ることによつて全能感を克服し、客観的に自己をみつめることができるようになることが大人になること、自我が成熟することの条件であるとした。<sup>(文)</sup>彼はこのように、精神の成熟性の獲得を自己愛やそれらに伴う全能感の克服と関連づけ、後に登場する自我心理学に大きな影

響を及ぼした。

フロイトの弟子のフェダーン<sup>(文2)</sup> (Federn, P.) は、フロイトが、自己愛と未熟性とを関連づけ、その病的側面を重視したのに対して、健康な自己愛の存在を重視し、病的自己愛と対比させた。他方、コフート<sup>(文3)</sup> (Kohut, H.) は、自己愛が、発達史的にまた状況的に十分充たされない場合、(筆者の言葉で言えば、空虚感や見捨てられ感が生じたとき) その挫折の代償として、空想的で肥大化した自己愛ないし、誇大化した自己が顕在化するとした。このような病的自己愛に支配されると、他者を見下し、傲慢な態度をとり、現実検討は失われる。また、その全能感や依存感情が傷つけられると、他者に対し怒りの感情をむき出しにしたり、逆に自分の殻の中に閉じ籠もり、自分を傷つけたり、演技して良い子のように振舞おうとする。このような、防衛的な心理機制の発見は自己愛パーソナリティ(カーンバーク Kernberg, O.)<sup>(文4)</sup> という概念を生み出し、さらにそのような疾病概念が、後にアメリカ精神医学会の疾病分類(DSM-IV)<sup>(文5)</sup>の中に組み込まれることになった。

#### 四、精神的成熟について

これまで、青年の精神の未熟性とはどういうものか、またその未熟性はどのようにして生まれるかといった点について私見を述べた。本章では、その対極にある精神の成熟性について触れておきたい。精神の成熟性を表わす指標の一つとして、積極的な内省能力がある。

積極的な内省能力あるいは自己洞察能力とは、自分というものをいったん突き放し、他者の目から自分を眺めることができる能力のことを言う。別の言葉で言えば、それは、自己を客観的に見ることによって、一度自分の思考

を相対化できる能力である。つまり、自分以外のもう一人の自分が、外から自分を判断、評価できるということ。つまり、サイコ・ドラマで言う観察自我をもっていることが、精神的成熟の主要な指標といえる。なお、このような内省能力をもつ者は、第三者の評価や判断に積極的に耳を傾ける謙虚さをもつ。このような人はいつも、いったん、自分から距離をおくことができ、複数の人々の評価に耐え、色々な意見を受け入れるだけの寛容さをもつと共に、自分にできることと出来ないことをはっきりと見極めることができる。言葉を代えていえば、現実と理想との間のバランスがとれていること。身の丈にあつた選択ができること。自分のできる範囲内について責任感と規範意識をしつかりと持つことができ、自分の与えられた役割を遂行することができることが、精神の成熟性と深いかわりがある。

精神の成熟性を表わすもう一つの指標として、昇華能力が挙げられる。この能力は、さまざまな生理的、心理的、社会的欲求を、さらに高次のスピリチュアルな欲求へと高めることができる能力である。精神の成熟がまだ十分でない人は、生理的、心理的、社会的欲求の充足によつて自己満足する。ところが、この欲求をスピリチュアルな次元まで高め、昇華しようとする人は、自己中心性や自己愛的な構えに囚われることなく、自己超越的な創造的同一性と利他的な発想によつて、行動することができる。昇華能力と自己中心的言行とは対極的な関係にある。昇華能力のある人は、このように、広い意味で公共的立場から行動したり発言することができる。

知識や技術のみを重視し、効率や成果のみで人を評価する社会は、精神的に成熟した社会であるとは言えない。こうしたあり方は、企業の内省能力や昇華能力、つまり成熟性が問われるだろう。先端的なハイテク企業に勤務する二〇代、三〇代の若者に「燃え尽き」によるうつ病や適応障害が多発しているという現実を知れば、このことは明らかである。ニートやフリーターの不気味な増加は、第三次産業の繁栄を中心として発展する現代社会の精神の

病理を表わしているように思えてならない。自己超越的、利他的な動機によって、どれだけ適切な判断ができるか、相手をどれほど配慮できるか、そうしたことが、次世代を荷う青年達や彼らの社会に問われているといえよう。

## 五、人格障害について

これまで、青年のメンタルヘルスについて論じる際の基本的な枠組みとして、精神の未熟性と成熟性について考えて来た。

この精神の未熟性としてくれるような心の枠組みをさらに掘り下げていくと「人格障害」という「岩盤」に突き当たる。

もちろん、精神的に未熟な青年達が、すべて人格障害者であると言うべきではない。しかし、精神的に未熟な若者の深層意識構造を探っていくと、その心の奥底に人格障害やその近縁の病態を呈するものが多いように思う。少くとも彼らは、「人格障害化」しやすい心的傾向をもっているといっているのではないか。もともと、人格が「障害」されるか否かという点に関しては、議論の余地がある。また、いわゆる人格障害なる病態が、固定化したものではなく、発達史や状況に依存した動的な概念であることも考慮に入れる必要がある。つまり、状態や生育歴によつて、人格障害化したり、周囲の働きかけによつて健康な状態に回復したりすることを、たえず、頭に入れておくべきだと思う。<sup>(文6)</sup> 以上の点をふまえた上で、青年のメンタルヘルスについて考える際の手がかりの一つとして、人格障害について考えてみたい。

アメリカの精神医学会の作成した「DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引」<sup>(文6)</sup>によれば、人格障害の全般的診断



基準は、下記の如く記されている。

A、その人の属する文化から期待されるものより著しく偏った、内的体験および行動の持続的様式。この様式は以下の領域の二つ（またはそれ以上）の領域に現れる。

- (1) 認識（すなわち、自己、他者、および出来事を知覚し解釈する仕方）
- (2) 感情性（すなわち、情動反応の範囲、強さ、不安定性、および適切さ）
- (3) 対人関係機能
- (4) 衝動の制御

B、その持続的様式は柔軟性がなく、個人的および社会的状況の幅広い範囲に広がっている。

C、その持続的様式が、臨床的に著しく苦痛、または社会的、職業的、または他の重要な領域における機能の障害を引き起こしている。

D、その様式は、安定し、長期間続いており、その始まりは少なくとも青年期又は成人期早期にまでさかのぼることができる。

E、Fの項は省略

なお、DSM-IVは下記のような多軸分類からなっており、5つの軸がある。

I 軸 臨床疾患

II 軸 人格障害、精神遅滞

III 軸 一般身体疾患

IV 軸 心理社会的および環境の問題

## V 軸 機能の全体的構造

このように多軸システムによって、診断を行う理由は、疾患を総合的かつ系統的に評価を行うためであり、もう一つは、臨床的、教育的、研究的状況において、生物、心理、社会的モデルを適用するためである。

人格障害は、このようにⅡ軸に属する診断であり、人格障害を精神疾患と判断するためにはⅠ軸からⅤ軸を統合して考えることになる。

人格障害は、三つのグループ（クラスターA、クラスターB、クラスターC）に分けられている。

### (a) A 群人格障害 (Cluster A Personality Disorders)

- (1) 妄想型人格障害
- (2) 分裂病質人格障害
- (3) 分裂病型人格障害

### (b) B 群人格障害 (Cluster B Personality Disorders)

- (1) 反社会性人格障害
- (2) 境界性人格障害
- (3) 演技性人格障害
- (4) 自己愛性人格障害

### (c) C 群人格障害 (Cluster C Personality Disorders)

- (1) 回避性人格障害
- (2) 依存性人格障害

(3) 強迫性人格障害

DSM-IVでは人格障害を上記したように分類している。いわゆる精神的に未熟な青年達といっても、健康度という点からみると比較的高い者が多いので、上記の分類の中では、人格障害の中では比較的軽症に属する自己愛性人格障害近縁の領域に該当するものが多いと考える。なお、自己愛性人格障害の場合、他の人格障害（クラスターA、B、C共）と合併していることが少なくない（図1）。

人格障害を精神疾患として位置づけるためには、I軸からV軸までの事項を考慮する必要があることをすでに述べたが、とくにI軸とII軸の関連において、人格障害は、気分変調症（神経症性うつ病）、不安障害、パニック障害、適応障害、恐怖症、摂食障害、PTSD、統合失調症、広汎性発達障害等の合併症（Comorbidity）例があることが、臨床経験で明らかにされている。（図2）

六、人格障害の誘因、症状、心理機制、予後及び全体構造について

ここで、DSM-IVの疾患分類の中で取り上げられている人格障害の誘因、症状、心理機制、予後（図3）について示した。そして、最後に人格の全体構造を図示した（図4）。このような人格障害の構造を知る

図1 自己愛性人格障害の合併症（Comorbidity）

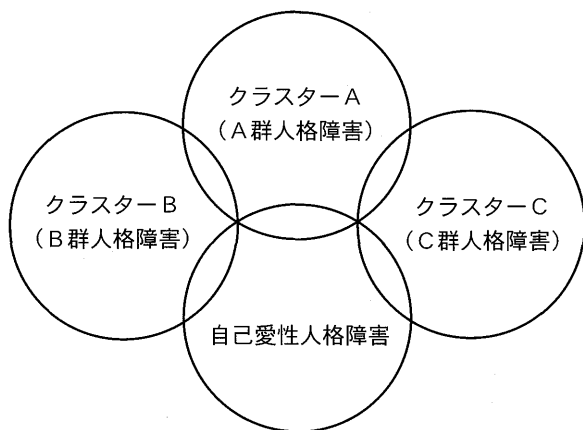


図2 人格障害の合併症 (Comorbidity)

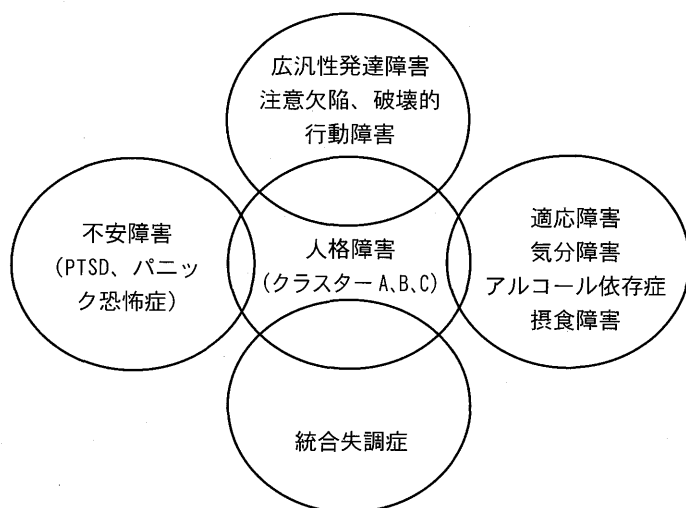
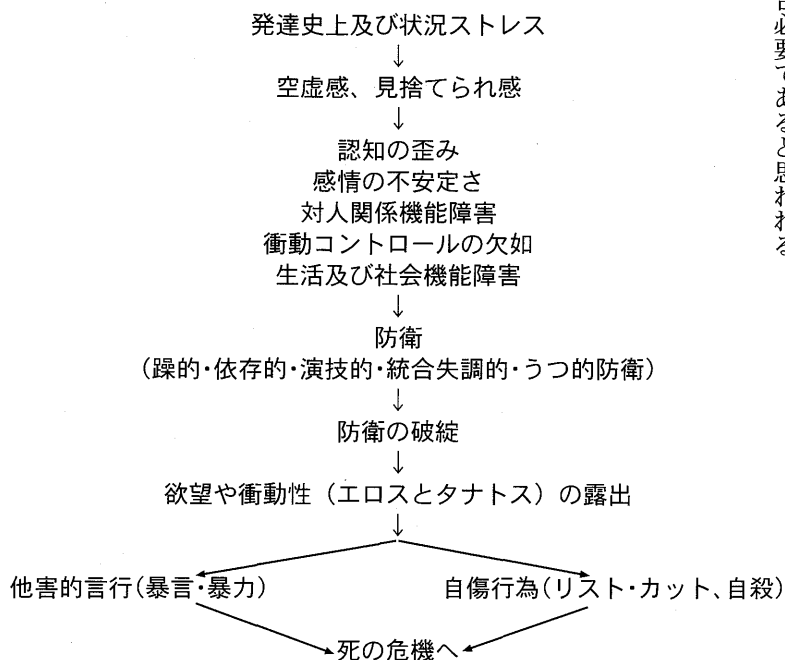
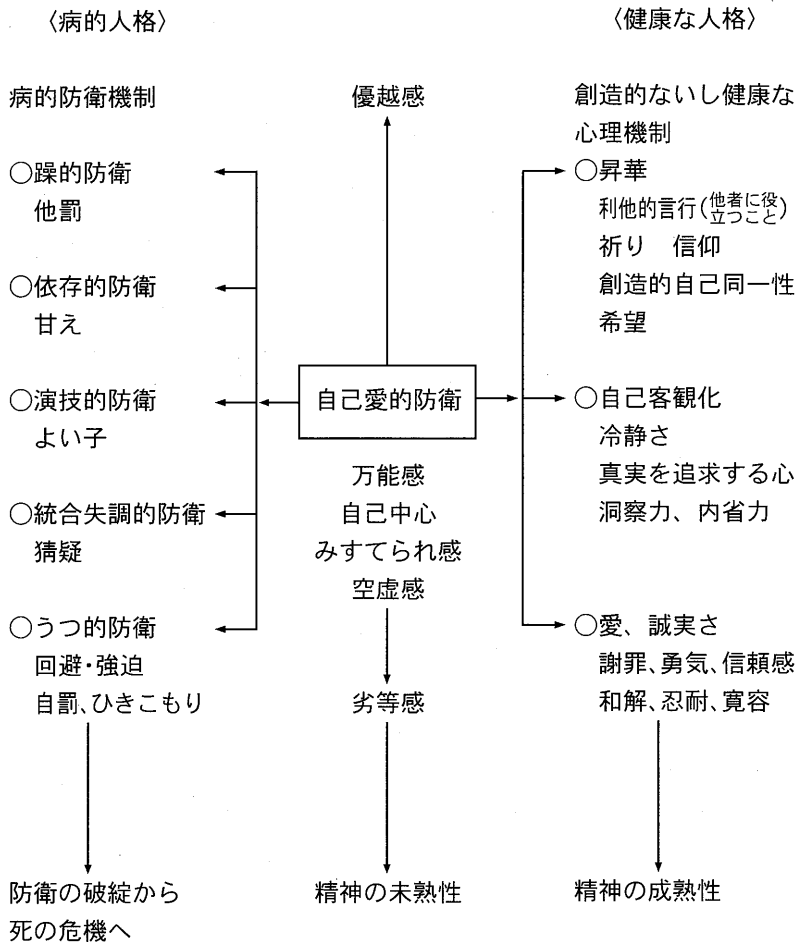


図3 人格障害の誘因、症状、心理機制、予後



ことは、自己中心的な若者のメンタルヘルスを考える場合必要であると思われる。

図4 人格の全体構造



## 七、いわゆる「人格障害化」について

人格障害は精神病質や性格障害とほぼ重なる概念であつて、前述した定義に従えば、その偏りのゆえに、「本人も悩み、社会的適応能力の障害を伴うもの」とされる。しかもそのような特徴は、体型や気質など生物学的、遺伝的要因によつて影響を受けるだけでなく、その人の発達史や生育歴、さらには状況的要因の影響も受けることが最近の精神医学の発達によつて明らかにされつつある。このことは、人格障害が生まれてから一生涯にわたつて、固定的で変わらないものでは決してなく、その人の人生において遭遇するさまざまな危機によつて変化するものであることを示唆している。

また、そのような臨床的観察によつて得られる知見を別の側面から考えると、人格障害は、周囲からの働きかけによつて変わる可能性があること、つまり、治癒したり寛解する可能性があることを示しているといつてもいいのではないだろうか。このように、人格障害が可変性のあるなかで、人格障害の病態を呈することを、筆者は、「人格障害化」と定義づけておく。

### (a) 生育史的要因によつて引き起こされる「人格障害化」

人格障害者の生育歴を調べてみると、発達史上重要な時期であるときみなされている乳幼児期において、親との死別や離別、拒絶、無視、虐待、過保護、溺愛、両親の不仲や葛藤によつて、幼小児期から過剰な役割を荷わされること、両親や同胞に対してよい子のように振舞わなければならないことを強制され続けられたといった事実が認められることが少なくない。

そして、少なくとも、臨床場面においては、このような事実を伴う心の傷（トラウマ）が、青年期に至り人格障害の発症に少なからぬ影響を及ぼしていると思われるケースにしばしば遭遇する。他方、生まれつき精神遅滞や学習障害、運動能力障害、コミュニケーション障害、広汎性発達障害、注意欠陥及び破壊的行動障害などがあるのに、母親や友人、教師などがその事実には気づかなかつたり、その事実を受け入れようとせず、彼らからいじめられたり、虐待されたりして、それが心的外傷（トラウマ）となり二次的被害ないし二次的外傷を受け、青年期に至り「人格障害化」するケースが少なくないことを、臨床場面においてしばしば経験する。

(b) 状況要因によって引き起こされる「人格障害化」

筆者は、臨床現場において、重篤な病や死など限界状況に直面している人たちに遭遇してきた。それらの患者の中に、普段は常識も教養もある人が、突如として自分を傷つけたり他人を攻撃するなど「人格障害化」するケースを再三経験してきた。

彼らの多くは、自分の身体の喪失や親しい人との離別や死別の危機に直面するとともに、これまで持っていた身分、役柄、自分の心や体、それに長年親しんできた自然などから「見捨てられる」ことへの怖れや不安を持ち、そのことが「人格障害化」する誘発要因となっていることが少なくない。しかし、健康が回復し、そのような危機的状況を脱すると、いったん「人格障害化」したさまざまな言動は、うそのように消失するという経験を再三もつた。

つまり、臨死患者や重篤な精神障害者の場合、病勢が悪化したときだけ「人格障害化」し、さまざまな精神病的な病状を呈するものの、いったんそうした病気から脱却したり、状況が変化したりすると、多少の病像を残す場合もあるが、ほぼ正常な状態に戻ってしまうケースを数多く経験した。このような経験を踏まえていえば、筆者は、人格障害というものは、決して固定的、静的な概念ではなく、「生育歴」や「状況」等の中で形成され

る動的な概念であつて、万人が環境や状況次第では「人格障害化」する可能性を持つていると考える。

## 八、人格、氣質、性格、障害

筆者は、これまで人格障害という言葉を随所で用い、七章では「人格障害化」という用語も用いた。しかし、よく考えてみると、人格が障害されるという考え方は、さまざまな誤解を産む可能性がある。一体「人格」が「障害」されることはどういうことか。一度、ラディカル（根源的）にこの問題を考えてみる必要がある。

人格障害という診断名は、日本精神神経学会も採用している。しかし、『DSM-IV-TR精神疾患の分類と診断の手引き』を翻訳した高橋三郎は、この本の中ではこの用語を使わず、パーソナリティ障害と訳している。その理由として、長年の臨床経験から、人格障害という言葉は、本人や家族にスティグマとなることが多いこと、精神疾患であると病名告知をした患者が将来を悲観して自殺してしまったという苦い経験を挙げている。<sup>(文14)</sup>

本来、人格(personality)と性格(character)とは同義に用いられる場合もあるが、一般的には、性格(character)は、語源的には「彫り付けられたもの」であり、生得的固定的な色彩が強く、人格(personality)と氣質(temperament)の中間に位置する概念である。氣質は遺伝生物学的要因によって影響を受ける割合が多い。たとえばクレッチマー(E.Kretschmer)は、細長型の体型は分裂氣質、肥満型の体型は躁うつ氣質であるという学説を打ち出した。このように、体型と氣質との結びつきを重視した考え方は、より遺伝、生物学的視<sup>(文18)</sup>点にたつた分類方法であるといえよう。他方、人格は、社会的規範や道徳、価値など、自己超越的な領域に入れる必要のある概念であると思う。性格とというと、正常からの偏り、つまりズレが問題になる概念である。たとえば異常性格(K.Schneider)といえは、固定



的で価値中立的な概念である。天才のようにこの世的には価値が高い人であっても、犯罪者のように反社会的行動をとる人であっても、性格が標準ないし正常から著しく逸脱し偏っていれば異常性格と判断される。

ドイツ精神医学においては、この正常から著しく逸脱し偏っているという面を強調すれば異常性格ということになるが、とくに反社会的側面、それをもっと具体的に言えば、自傷他害的側面を重視した考え方を強調すれば、精神病質という概念になる<sup>(文9)</sup>。この概念は、「自分を悩まし人を悩ますもの」と定義され、この考え方がDSM-IVの人格障害の概念にもっとも近いと思う。

ところで、personality disorderを人格障害と訳することに對して、筆者は問題があることをすでに指摘した。そもそも人格とはラテン語のペルソナ (persona) に由来し、persona は per (through) - sona (speak) の名詞形で仮面という言葉と関係し、劇中の人物や役割、役柄を意味するという。また、ペルソナの語源は、「響き渡る」「反響する」という意味をも有する。

このことは、人格 (persona) がことばを通して生きた人と人、人と神との役割や信頼性、あるいは関係性を示す用語であるということを示唆している。日本語の人格の「格」は「高くそびえる」を意味し、この言葉に道德意味が含まれていることがわかる。たとえば「品格」といえば正しく善惡の判断を行えること、道德的価値を有するなどとといった意味を有している。また人格は、歴史や時の中で自己同一性の実現を成就させる力という意味もある。いずれにしても人格という概念は、静的、生物学的遺伝的な要因によつて規定されるものではなく、人と人、神と人とのつながりの中で共鳴し合う動的な関係概念とみなされていることは明らかである。

ユダヤ・キリスト教における人格概念は、「救済と信仰」との関連の中でとらえられている。すなわち人格は、神による被造物として造られているだけでなく、「神の似像」(創一・二七)として創造されたものであり、人格を持

つ人間は神の救いと選びと恩恵とを与えるべく呼び出され、神との関係の中で響き合う存在である。人間は、神と契約を結ぶことによって、両者は人格の部分において相互に響き合うことができる。その際、人間の側は、自由と責任を持つて神の招きに応答する。つまり、人間は人格において神と関係性を持ち、神と出会い向き合う。他方、神はこの世に聖霊を与え、この世の終わりまで信徒と共にいてくださる。こうした神と人との出会う場となるのが人格である。したがって、人格は心身によって支えられてはいるが、心身を超越した存在であるとするのがユダヤ・キリスト教の人格論の一貫した立場であらう。

人格は、神と人、人と人との関係を表す概念だけではなく、「人格の尊厳」という言葉が象徴するように、どんな人間であらうと、一人ひとりがかけがえのない存在であるという人権意識とも密接な関連性を持つ。それだけではない。人格の働きの中には、人と人との連帯や共生を促す根源的なエネルギーを含んでいるといえるだろう。

このように考えてくると、性格は病んだり傷害を受けたりすることはあっても、人格はそうした遺伝的生物学的存在としての「自然」から超越した側面を持った存在であると考えられ、軽々しく病んだり傷害を受けるといった言葉の使い方をすることは慎重にしたほうがよいのではないかと考える。むしろ、性格は、病んだり傷ついたり障害を受けたりしても、神への祈りや他者とのよき関係性や相互性を持つことのできる人の場合、人格面では「健康」であるといえると思う。

## 九、精神的に未熟な若者に対してどうかかわるか

人格障害の構造全体（図1、2、3、4）を理解したうえで、精神的に未熟な若者に対するかかわり方について

考えてみたい。

(a) 人格障害に関する知識を学ぶことの大切さ——若者の心に寄り添うために——

人格障害化した心性を持つ若者の心を理解することは容易ではない。そもそも人格障害という病は、「自分を悩ませ、他者をも苦しませる」疾患だからだ。本人にとつても援助者にとつても、この障害が対人関係の機能障害を伴うがゆえに、両者の間で共感関係を切り結ぶことは極めて困難である。そのため、人格障害者とその周囲の人々との間で心の共鳴、共感関係を成り立たせるためにはどうすればよいかが大きな課題となる。

まず、もう一度図1、2、3、4を見ていただきたい。これらの図を見ることによって人格障害に関するアウトラインがおぼろげながら理解できるのではないだろうか。もちろん専門用語がたくさん出てくるので理解したい部分もあると思われるが、詳細は「DSM-IV-TR精神疾患の分類と診断の手引」等を参照されたい。ひとつだけ言えることは、こうした人格障害あるいは人格障害化した心のメカニズムやその全貌を理解すること、つまり、その深層心理に分け入り、彼らの心的構造がわかるということが、彼らの心に寄り添い共感するための前提条件になるのではないかと考える。彼らの心の奥底に沈殿する深い見捨てられ感や空虚感、それに伴う躁的、あるいは演技的、依存的、統合失調的、抑うつ的（回避的）防衛機制とその破綻のプロセスに気づくことは、彼らと共感性を切り結ぶ基礎となると思う。

(b) 陰性感情（怒り）とどう向き合うか

人格障害化した青年たちを支援していて、しばしば経験することであるが、彼らは時に自らの衝動性を制御できず、怒りの感情を援助者にぶつけてくる。その怒りは、表面的には彼らが援助者に対する依存的（まつわりつき）

感情を満たしてほしいと願ったり、理想的対象になつてほしいという期待に、援助者が十分応えてくれなかったことへの不満によるものであると解釈される。

なにしろ、彼らは、無理難題をふっかけてくる。治療の場面におけるキャンセル、遅刻、中断、早退など契約違反を繰り返すことは朝飯前だ。しかし、実は、彼らのそうした怒りは乳幼児に受けた虐待や現在直面している状況危機に伴う心の傷を援助者にぶつけるために生じているのかもしれない（投影的同一視）ということ援助者自身が理解し、その怒りを受け止め、向き合い、荷う覚悟が必要であるということに気づかなければならない。つまり、彼らは、自らの空虚感や見捨てられ感に伴う怒りの感情を援助者にぶつけてくる。そして彼らは、援助者もその怒りに共感し、その苦しみを分かち合い、荷つてほしいと願っているのである。

彼らのこうした心理を援助者が読み取ることができず、彼らの怒りに対して自らも陰性感情（怒り⇨逆転感情）をもつて「復讐」するならば、事態はますます悪循環に陥り、信頼関係は根本から崩れてしまうだろう。援助者が、このような悪循環に陥つたということに気づいたならば、ただちに彼らに謝罪することが治療上の大原則である。この点について、援助者の知恵と謙虚な態度が求められる。

最近、乳幼時、親から虐待されたことのある人格障害者（A子とする）と面接したが、治療が終わつて処方をし、次の患者と面接を始めたところ、A子がしつこく薬の内容や量を確認するために説明を求めてきた。筆者は後に数十人の患者が待っているのもう少し待つてから説明させてほしいと担当の事務員に伝言した。小一時間たつて待合室をのぞいたところ、もうA子の姿はなかった。翌日保健所の職員から電話があり、A子が筆者の対応をめぐつて「主治医は思いやりのない、冷たい、見捨てられた」と文句を言ってきたとの知らせを受けた。筆者は、それが筆者への依存感情や理想化への期待が裏切られたことへの攻撃（怒り）であることに気づいた。次の面接の日、

彼女は左前腕部を真っ白な包帯でぐるぐる巻いて診察室に入ってきた。「なぜ」と筆者が聞くと、「私は先生に見捨てられた。淋しい。先生は私の欲求をすぐに受け止めてくれなかったので、自分がみじめになり、自らを処罰する意味でリストカットをした」と答えた。

もっと驚いたことは、彼女は、派手なアイシャドー、厚化粧、まっかなスカートといったいでたちで筆者の前に現れたことだった。筆者は、前回、化粧もせず地味な洋服を着てきたのに「なぜ」と聞いた。すると、彼女は、「このようにすれば先生は私を見捨てず、私に関心を持ってくれると思ったのです。もっと私のことを配慮してもらいたいと思っておしやれをしました」と言った。筆者はこのようなA子との関係を結ぶ中で、彼女の抑うつ的防御、依存的防御、演技的防御、さらには躁的防御のメカニズムをよく理解することができた。そこで、筆者は、彼女の依存的感情に対する自分の陰性感情をコントロールできず、多忙だとか、患者がたくさんいるとかさまざまな理由をつけてA子の治療要求に応じなかったことを悔い改め、彼女にわびた。その後A子との信頼関係は修復され、現在に至っている。

## 十、青年のメンタルヘルスと教会

心を病む青年たちが、よく親や神に投げかけてくる問いは「なぜ俺を産んだ」という生きることへの不条理性への問いである。このような問いの背後には、「自分とは何か」「自分はどこに所属するのか」「自分には居場所がない」といった自分の「存在理由」ないし「存在の根拠」に関する問いと、「自分は何を生きがいとして生きていったらよいのか」といった「存在の目的」に関する問いとが隠されている。そして、この「存在の理由」と「存在の目的」

への問いは、共に「自分が存在することの意味」に関する問いである。

(a) この世の不条理性を問う若者に答える教会

「自分が存在することの意味」について完璧に答えることのできる人はいないだろう。人間は限界ある存在である。したがって、人間が知りえることには限界がある。この点について、聖書の言葉に耳を傾ける必要がある。

「わたしたちは、今は鏡におぼろに映ったものを見ている。だが、そのとき（完全なものが来たとき）には、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは今一部しか知らなくとも、そのときには、はつきりと知られているようににはつきり知ることになる。それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つはいつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」（コリントー一三・一二—一三）

この箇所が書かれた当時の鏡は、人間の顔がポーッとしか映らなかつたという。パウロは、このことを比喻に使った。人間は、この世において、すべての真理を明らかにすることはできない。「今は一部しか知ることができない」のである。「わたしの思いは、あなたたちの思いを高く超えている」（イザヤ五五・九）とイザヤも述べている（ヨブ一・八—九も参照）。しかし、将来は、「はつきりと（神の計画を）知ることができる」ようになる、こうパウロは証言している。

神の計画を信じることのできない人間は、自分と世界の中で生起する現象を「不条理なこと」ととらえる。彼らは、この世で生起することは不条理であるとの感覚によつて生じた空虚感や見捨てられ感に堪えることができない。この不条理性の感覚は、彼らの万能感に依拠するといえよう。「なぜ俺を産んだんだ」と叫ぶ青年たちは、自分が万物の全貌を明らかにすることができないこと、つまり万能感を満足できないことへの焦りや不安に苦しんでいる。ここにかねらの未熟なところがある。

「すべては空しい」(コヘレト一・一二)、「呪われよ、わたしの生まれた日は。母がわたしを産んだ日は祝福されてはならない」(エレミヤ二〇・一四)。「なぜ、わたしは母の胎から出て労苦と嘆きに遭い、生涯を恥の中に終わらねばならないのか」(エレミヤ二〇・一八)。「わたしの生まれた日は消えうせよ。男の子をみごもったことを告げた夜も。その日は闇となれ。神が上から顧みることなく、光もこれを輝かすな」(ヨブ三・三〜四)。

このように、人生や他者や世界に対して、懐疑的になっている青年たちに対して、教会人が人生の意味を知らしめるためにはどうすればよいのか。こうした彼らの問いに答えることが、教会人の大切な使命と役割であると思う。

(b) 「自分とは何か」を問う若者に答える教会

人間は、いつも「自分とは何か」ということを問う存在である。これに対して、神はどう答えようとされているのかということ、教会人は若者たちに伝えなければならない。生きる意味を見出せず、「なぜ俺を産んだ」と親に抗議し、人や神への懐疑ないし不条理感や空虚感、見捨てられ感に苦しんでいる青年たちに対して、教会は何ができるのか。

神も他人も自分の心の中もわからない。いや自分でも自分が何を考えているのかわからない。このように訴える若者は虚無的になり、身の回りに起こる現象はすべて不条理に見える。このような青年の心の悩みを、神はどのように見ておられるのだろうか。

「主は、すべての心を探り、すべての考えの奥底まで見抜かれるからである」(歴代誌上二八・九、その他、箴二〇・二七、エレミヤ一七・一〇も参照)。

しかし、人間は、自分の行った言動を自己反省し、自己洞察する時、「わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。」(ロマ七・一九)ことに気づく。その結果、良心的、信仰的な人は、「知らずに犯した過ち、隠れ

た罪からどうかわたしを清めてください」(詩篇一九・一二)と祈る。またパウロは、「わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、『霊』自らが、言葉で表せないうめきをもって執り成してくださいからです」(ロマ八・二六)と述べている。神の人間の心を見抜く力と、エレミヤが「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる」(一七・九)という人間の心の闇とが交錯する。イエスは、人々が彼を十字架につけようとしたとき、「父よ、彼らをお赦しください。彼らは自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ二三・三四、傍点筆者)と言われた。教会の指導者は、「自分が何をしているか知らない」若者にきちんとした方向性を与える使命がある。

(c) 慰められることによって慰めることができる人間を育てる教会

人間が生きる意味、すなわち自分の存在理由や存在の目的を確認するために、まず第一に、人や神から関心を持たれている、配慮してもらっている、慰められている、愛され信頼されている、勇気や元気をもらっているという体験が必要である。その意味で、教会が青年たちに対して安心できる場所、居心地のいい場になること、彼らを信頼し、配慮し、彼らに元氣を与える場所となることができること、そのためのエネルギーの源である神を指し示すことができることが求められている。

また、彼らが、教会や神や人を愛することができるよう訓練していく役割を教会は荷っている。つまり、教会は、神が常に青年たちと共におり、慰めてくださること、また神は人間にとって愛の対象となりうること、神は自己表示としての言葉と聖霊をもって我々に真実と愛を示してくださいること、このことを教会は、人と神への不信任感を持ち、この世に対する不条理感をもつ青年たちに伝えていく必要がある。

これまで述べてきたように、この世の悲しみとそれに伴う空虚感、見捨てられ感に苦しんだものは、神と人から慰められなければ、その悲しみから立ち直ることはできない。また、本当に慰められた体験がなければ、人を慰め



することはできない。このことを神は言葉をもって示される。イエスは自ら苦しんだという体験があるからこそ、慰めを求めている人の気持ちが理解でき、それゆえにこそあらゆる苦難に直面している人を慰めることができた。そしていったん神によって慰められた人は、苦しみの中にある他者を慰めることができる。

イエスは、「御自身、試練を受けて苦しめたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです」(ヘブライ二・一八)。「わたしこそ神、あなたたちを慰めるもの」(イザヤ五一・一二)「神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます」(コリントⅡ一・四)。

悲しむもの、苦しめる者、つまり、慰められることを必要とされる者は、神から与えられた助け主なる聖霊によって休息(マタイ一・二八〜三〇)と勇気づけ(マタイ九・二、一二)と喜び(使二〇・一二)を与えられる。その神の慰めと愛は、父親の愛、花婿や夫の情熱(イザヤ五四・五〜六)、母親の愛情(イザヤ四九・一四〜一五、六六・一一〜一三)にたとえられている。このような、神の慰めが与えられることによって、人は真の意味で人を慰めることができる。神からの慰めなくして自力で人を援助しようとすれば、メサイヤ・コンプレックスに囚われることになり、究極的には、人と神を嫌うことになるだろう。

自らがさまざまな喪失体験を通して苦しんだことのない人、病苦に苦しんだことのない人は、真の意味で「泣く人と共に泣く」(ロマ二二・一五)ことができない。このような人は人を慰めるつもりでも、かえって「小さな親切、大きなお世話」といった反発を受けるだろう。また、自らもメサイヤ・コンプレックスに悩むことになる。つまり、こうした人は自己も傷つき自己嫌悪に陥り、被援助者にさまざまな二次的な被害や外傷を与える存在になる(ヨブ一六・二、二一・三四参照)。

筆者は、子どもが自死した体験をもつある母親の言つた言葉を忘れることができない。「ある牧師は、息子が死んだ時、あなたの息子さんは生前信仰を告白していなかったから地獄にいくと言ひ、さげすんだ態度をとりました。この時の辛さは忘れることができません。私は後追い自殺をしようかと思ひました。誰も私の悩みを理解してくれず、疎外感に苦しみました。その時、ふつと苦難の僕とさげすまれ、人に捨てられて死なれたイエス様もそうだったということを思い出したんです。また、イエス様が十字架上で無残な死を遂げられた時、マリアがどんなに悲しんだか。その気持ちがわかるような気がしました。そして賤しい女が高価なナルドの香油をイエス様にかけた時、イエス様が喜んでその行為を受け入れられたことの意味がわかりました。この時、私は清らかな慰めを神様からいただいたのです」と彼女は筆者に語つた。

彼女は聖書の登場人物であるイエスやマリアに自己を重ね合わせ、自己存在の意味とその存在理由を悟つたのである。このように教会は悲しみを持つ人に慰めを与えることができ、そこで育てられた若者が、また人に慰めを与えることができる者となる。そのような器を創り出す教会作りが求められている。

(d) 教会に神がいつも共におり癒して下さると確信し、しかも神に対して喜びをもって応答できるような若年を育てる

心傷つき病んでゐる青年たちは、その多くが幼少時から学校や家庭の中で周囲の人々なり自分の心身から見捨てられたという体験を持つ者が多い。しかし、人間は、見捨てられることを好まず、誰かと共にいることを求める「関係存在」である。

聖書の中には、神は人と共に居られるということを根拠づける言葉ないし神の自己表示（メッセージ）が数多く見られる。教会人は、こうした神の言葉を青年たちの心に届くように、自ら「とりなし人」として、態度と言葉と

行動を通して「共にいること」を彼らに伝えなければならない。つまり、教会人は、心悩み、病む青年たちと共にいることを彼らに指し示さなければならない。イエスは、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ二八・二〇）と言われた。「いつも」とは、恒常的に同じ「空間」の中にということである。また、「世の終わりまで」とは未来時間を意味する。つまり、イエスは、時空間を越えて「あなたと共に」いると述べているのである。

このようなメッセージは、旧約時代から人類に伝えられていた。士師ギデオンに対して、主は彼に言われた。「わたしはあなたと共にいる」（士師記六・一六）と。このようにして、神が人といつも共にいてくださるということは、人間は神に愛される存在であるということである。しかし、神は人間が思うように操作したり、やみくもに依存することによって心を開かれる存在ではない。人間が神に愛されるためには、人間の側の態度、責任、つまり応答性が問われる。

「わたしは、高く、聖なる所に住み、打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にあり、へりくだる霊の人に命を得させ、打ち砕かれた心の人に命を得させる」（イザヤ五七・一五）。このように、神は人との間に一定の距離を保つ。神は無制約的に人の欲求に応えたり、一方的に人によって操作される存在ではない。そうではなくて、神は、万能感をもったり、自己愛的な人には近づかれず、砕かれた自我を持ち、謙虚な態度をとる人と共におられる。このように見てくると、神が共におられること、神に愛されること、言葉を代えて言えば、神が自己の存在理由や生きる目的となるためには、人間の側の態度が問われてくることがわかる。ユダヤ・キリスト教における人と神との関係は、「相互性」があるというところに大きな特徴がある。

神は、人の苦しみや病を癒す存在である。「もしあなたが、あなたの神、主の声に必ず聞き従い、彼の目になう

正しいことを行い、彼の命令に耳を傾け、すべての掟を守るならば、わたしがエジプト人に下した病をあなたに下さない。わたしはあなたをいやす主である」(出エジプト一五・二六)。

ここで神は人と共におられるだけでなく、「わたしはあなたをいやす神である」と自己主張される。しかし、ここで注目すべきことは、神が人間を癒すためには主に服従し、正しいことを行い、掟を守ることが求められていることである。

医者が心病む患者に対して、向精神薬を飲み続けないと再発しますよと勧告しても、その注意を守らない人は癒されることなく、症状の再発に悩まなければならない。また、アルコール依存症者に対しては、一度入院して徹底的に断酒し、二度とアルコールを飲まないように決断したらどうですかと勧めてみても、自ら「アルコール依存を癒したい」と思わない患者は、永遠にアルコール依存から解放されることはない。以上これまで述べてきたことをまとめると、神と人とは、相互的關係にある。神は前述したようにたしかに苦しみ、悩み、病む人に対して慰め、共にいてくださり、癒してくださる存在である。しかし、このような神からの恵みを人間の側が受け取るためには、人間の側が試練を受け、それに耐えること、へりくだる心を持つこと、主への追従、正しいことを行うこと、掟に従うことが求められる。この意味で神と人とは、相互的關係にあるといつてよい。

(e) 神との出会を促すために、実体験を重んずる教会

神と人との出会いについて考える際に、記憶に残るある場面を思い出す。イエスの弟子であるナタナエル(「神は与え給う」の意＝別名バルトロマイ)がイエスに出逢う場面である。

イエスの弟子であるフィリポは、その友であつたナタナエルにイエスに会つたことを話した。ところがナタナエルは、イエスの出身地が小さい村であることを理由に、フィリポが話題にしたイエスに対して懐疑的というか軽

蔑するような態度をとった。ナタナエルは、ナザレという小さい村出身のイエスに対して、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」(ヨハネ一・四六)と言っている。このことは、少なくともナタナエルがイエスに対して、よい印象を持つていなかったことを示唆している。こうしたナタナエルの発言を聞いたフィリポは、間髪を入れず「来て、見なさい」と彼に言った。フィリポは、ここで実体験の重要性について語っているのである。ナタナエルはこれまで持つていた偏見や自分の考えに固執せず、友人のフィロポの声に従った。おそらくナタナエルとフィリポの間には、信頼関係が成立していたからであろう。その時、ナタナエルとイエスの間に新しい「出会い」が生じたのである(ヨハネ一・四三〜五一)。

この個所から学ぶことは、援助者にとって大切なことはまずイエスを知ること、そのためには、なによりも実体験を重ねること——「来て見なさい」!——人間の側の果敢で勇氣ある態度、すばやい決断、柔軟な思考の大切さが強調されている。心病む人に偏見をもつことなく接するためには、まず、彼らに対して色メガネをかけず親しく交われる雰囲気のある教会作りがなされなければならない。そのためには障害者をお客さん扱いしてはならない。

(f) 癒しの相対化と救いの絶対化を悟らしめる教会

筆者の外来にやってきたある若者は、「どうやって生きていったらよいのかわからない」「これまでの人生は失敗だった」「今後両親が死んだら、自分はどうなるのだろう」「この人生は、早く終わりにしたい。つまらない人生だった」と言った。

たしかにこの青年は働いていないし、学校にも行っていない。身の回りの世話はすべて親に面倒をみてもらっている。その意味で、彼は社会機能及び日常生活機能の障害があり、いわゆる「社会死」の範疇に属する人である。また、生きがいを失っていることから自己同一性障害に陥っているともいえよう。そして、親の死に対して不安を

持ち、彼自身、希死念慮に囚われていることから考えると、生きながら、心理的には「陰府」の世界にいるといつていいのかもしれない。

ここで筆者が注目することは、彼の時間観と空間観である。彼の時間観をみてみよう。彼の過去と現在と未来は暗闇の中にあり、光は見えない。したがって生きる意味も見出すことができず苦しんでいる。「これまでの人生は失敗だった。未来に希望はない。この人生を早く終わりたい。親亡き後、自分はどうなるのだろう」という言葉が、彼の否定的時間観をよく表している。

それでは、彼の空間観はどうか。「どう生きていったらいいのかわからない」「今まで生きていてもつまらない人生だった」という彼の嘆きは、彼が、現在「住まう」空間がなく、この世にいつらくなっていることを示している。居場所がないこと、今いる場所が居心地がよいくないということは、彼がこの世から疎外されていることを意味する。彼にとって、今、身体的には生きているが、精神的には死んだのも同様であること、つまり、その状況を象徴言語を使つて表現するとすれば、彼は「陰府」の世界に埋没していることを示唆していると言えよう。

このような訴えをする青年たちに、教会人はどう応えていくべきなのだろうか。

彼らは自分が居心地のよくない時空間の中で、生と死について考えている。もちろん教会人は、教会の中に、彼らが居心地のよい空間を作るべく努力すべきだろう。しかし、それだけで充分というわけではない。冒頭で登場した青年は心を病んでおり、心の危機の中にある。しかも彼は、生を受け、今存在し、やがて親や自分も死ぬであろう時空間だけを射程に入れて自らの生を考えている。このことは、彼が生きている時空間を相対化せず、絶対化していることを意味する。しかし、ユダヤ・キリスト教においては、個人にせよ、宇宙にせよ、この世において贈与された時間と空間は限定的なものであり、隠されている真実があり、この世界は相対的なもの、部分的なものであ

る（コリント一三・一二、詩一九・一三、使一七・二三）。また、この世、すなわち此岸（現世）における癒しは相対的で限界のあるものであり、彼岸（来世）の救いは、絶対的、永遠的なものである。

しかし、この青年は、此岸、すなわち現世の時間と空間を絶対化していて、袋小路に入り込んでしまい、心理的視野狭窄に陥っている。この世、すなわち此岸を絶対化すれば、病んで生きなければならぬこの現世は、不条理に満たされたものと感じられるだろう。

神にある時間と空間は、神の本質である永遠の次元において見知られなければならない。個や宇宙のそれを超越したものである。神にある未来は「目の涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもものは過ぎ去ったからである」（ヨハネ黙示録二二・四）という希望の中にある。「イスラエルを贖う万軍の主は、こう言われる。わたしは初めてであり、終わりである」（イザヤ四四・六、黙示録二二・一三、二〇、ペトロ一・二〇）。

このように、神は宇宙や個の空間を超越した存在でありながら、人類を贖うものである。ちなみにこの贖うこと（ギリシャ語 *apolytosis*）という言葉は、救い出すこと、解放すること、希望を満たすこと、癒して全きものにするということといったすべての意味を含有し、新約の中心概念であり、常に救済史、和解、復活と有機的に結合しているという。心身の病というリアリティを相対化することは、この世に生きる者にとって大きな試練であり、苦しみである。しかし、教会は、病者に、この苦難に耐えうる信仰と希望と愛を与えるべく語り、祈り、とりなすことを求められている。

(g) 病む空間から生き生かされる時空間へと移ることができるという希望を与える教会

「わたしの神、主よ、叫び求めるわたしを、あなたは癒してくださいました。主よ、あなたはわたしの魂を陰府

から引き上げ、墓穴に下ることを免れさせ、わたしに命を得させてくださいました」(詩三〇・三、四)。神は「死者に命を与え、存在しないものを呼び出して存在させる」(ロマ四・一七)。「死んだ者にも福音が告げ知らされたのは、彼らが、人間の見方からすれば、肉において裁かれて死んだようでも、神との関係で、霊において生きるようになるためです」(ペトロ一四・六)。さらにエゼキエル書に描かれている「枯れた骨が復活する光景」(三七章)も病や死からの再生を預言しているといえないだろうか。

ここで記されている神の霊は、人間に力と勇気を与えるものであり、その神の霊は、人の心の中にも内住する(エフエソ三・一六、一七)。また神の霊は「水面を動いていた」(創世記一・二)とある。この「動く」というヘブル語は、「浮かぶ」「振動する」「孵化する」といった意味を持つ<sup>文1</sup>という。また「動いていた」とは、鳥が羽をばたつかせている有様であり、神の息の激しい活動を指す<sup>文2</sup>という。そして、それは共感的、生成的、動的、喚起的な用語であるといえよう。

ちなみに申命記三二・一一には、「鷲が巢を揺り動かし、雛の上を飛びかけり、羽を広げて捕らえ、翼に乗せて運ぶように」といった比喻を用いて、神の霊の働くさまを、生き生きと描いている。また、この一一節の前の節では、「主は荒野で彼を見いだし、獣のほえる不毛の地でこれを見つけ、これを囲い、いたわり、御自分のひとみのように守られた」(申命記三二・一〇)と書かれており、この箇所は心弱く病んでいる者への慰めの言葉として記憶されるべきであろう。また、神の霊の授与は、前述したように、ちょうど卵を孵化する源である母胎の中で始まるという比喻を使って説明されていることも付記しておきたい。

この世的此岸的な次元から見れば、健康や癒しの概念は、多義的であり、部分的である。どんなに健康な人もやがては病み、死ぬし、心身の癒しも一時的である。他方、終末論的、超越的次元にたてば、病が信仰を賦活する場



合は、パウロも言ったように「弱い時に強い」(コリントⅡ一・一〇)ということになる。

「神は光であり、神には闇が全くないということです」(ヨハネ一・五、ヤコブ一・一七、詩一三九・一一―一二)。この神を信じ、その神のことばとつながることができれば、神のことばは、永遠的、本来的生そのもの、命そのものであり、闇の中で輝く光(ヨハネ一・三―四)そのものであるから、われわれは、この世的、此岸的な時間間に制限されながらも病氣や障害とそれに伴う苦しみは相対化される。

学ぶことも、働くことも、家庭をつくることもできない「社会的死」の状態に陥り、象徴的ないし、心理的には「陰府」の中で希望もなく生きている青年たちに、このようなユダヤ・キリスト教の時間観や空間観に基づく信仰の意義を教会人が告げ知らせること、そして、神のことばににもとづく信仰によって歩むことは永遠的本来的生に結びついている(ヨハネ一・三)ことを伝えることが大切である。そして青年たちが、この隠された真理を信じたならば、彼らの健康観、病氣観、障害者観も変わってきて、それまでマイナスの評価しか与えられてこなかった病氣や障害に対しても、ある距離をもってみることができ、相対化し、自己の現状を多角的かつ、全体的、包括的、統合的に見るようになるのではないだろうか。

## 十一、結び

キリスト教と諸学との対話ということを頭の中におきながら、青年のメンタルヘルスと教会というテーマで本稿を執筆した。

筆者の能力の限界もあり、自分の意図するところをどれほど読者に伝えることができたかと思うと、内心忸怩た

る思いになる。もし、本誌に執筆した内容において、神学的にもメンタルヘルスの問題についても、筆者の意図したところが伝わりにくかったり誤ったところがあれば、ご教示、ご叱責願いたい。

ただひとつだけ最後に申し述べておきたいことがある。かつて筆者は二十年間、栃木県にある自治医科大学で診療と教育と研究に携わってきた。病棟はたいいてい六人部屋で、回診すると、平均して二、三人は枕元に聖書が置いてあった。日曜日に外出して教会に行ったり、牧師を病室に招くことを希望する患者も数多くいた。その後、東京に来て、隠退牧師と共に開拓伝道を始め今年で五年目になるが、現在、毎日曜日二〇名前後の方々が集まる。筆者が教会の近くで診療をしているせいか、教会出席者の三分の二はなんらかの心の悩みを抱えておられる。

日本では、キリスト教の信者数は、まだ国民全体の一パーセントに満たないという。このような数字を頭に入れて考えると、心病む人々のキリスト教に対する関心度は高いと言わなければならない。しかし、よく考えてみると、心病む人々がこれだけ数多く教会に集まってこられるという現実をみると、彼らのほうが、いわゆる健康な人よりより神に近い存在なのではないかという気がする。そう考えると、教会人は、もつとメンタルヘルスに関心を持ち、彼らをつまずかせないように、心の病に対する知識について学ぶと共に、心病む人々をケアする技術や態度を身につけ、さらに心病む人々と神との間の橋渡し役となることを期待されるのではないか。そこに教会の使命のひとつがあると思う。

#### 註

(一) フリーターとは、フリーアルバイターの略称。定まった職業を持たず、生き方もはつきりしない若者を指す。一般的には学生（高校及び大学在学者）及び主婦を除く一〇代〜二〇歳代の若者を指すが、三〇〜四〇歳代の中高年フリー

タも増加しつつあるという。彼らは、進学もせず、定職につかず、臨時のアルバイトやパートタイム労働によって不安定な収入を得ている。フリーターの数は、二〇〇五年では推計約二〇〇万人、〔平成一八年版労働経済白書〕ならびに総務省試算〕と見られている。

- (2) ニート (NEET: not in education, employment, or training) は、イギリスの内閣府が作った「Bridging the Gap」という調査報告書に由来する。学校など教育機関を中退するか、卒業しても就職も進学もしていない一五〜三四歳の未給の者を指す。フリーターは、自分で不安定ながら何らかの手段で生計を得ており、失職した場合は求職活動をするが、ニートの場合は、そうした働く意欲をもとと持っていない。彼らは自己の生き方に自信を持てず、就労に向けた努力もせず、時に享樂的、反社会的行動に走るか、無為な毎日を過ごしている。二〇〇五年時点で一五〜三四歳の約六四万人の若年(学卒)無業者がいるという。〔平成一八年版労働経済白書〕

- (3) パラサイト人間とは、親を寄主として寄生(パラサイト)する未婚者を指す。彼らは、学校を卒業しても親と同居し、彼らに家事を任せ、自分の働いて得た収入の大部分を自分のために使う。したがって、一般的には、時間的経済的に余裕があると見られている。その生活水準を維持するために、結婚への動機付けも乏しい。しかし、近年は、若者の雇用も必ずしも安定しておらず、こうした人々の中には、精神的に不安定になる者もいる。

- (4) メサイヤ・コンプレックスとは、他人があまり援助を求めているのに、親切の押し売りをすることを言う。つまり、善意の押し付けをする。その背後には、賞賛を期待し、評価されることへの欲求が隠されているとみなされる。

- (5) 二十世紀後半になって発達したアインシュタインの相対性理論に代表されるような現代の理論物理学や量子力学によつて得られた成果によれば、時間と空間とは相互に関連があること、時空間は絶対的なものではなく相対的なものであつて、限界があることが明らかにされた。ちなみに、こうした理論物理学では、「場」「波動」「光」「エネルギー」なども、こうした学問を模索する基本的な概念として使われている。

文献

- (文1) Freud, S.(1914) Zur Einführung Narzißmus. (懸田克躬、高橋義孝他訳 1969 「ナルシシズム入門」フロイト著作集 5) 人文書院
- (文2) Federn, P.(1929) On the Distinction between Healthy and Pathological Narcissism)
- (文3) Kohut, H.(1971). The Analysis of the Self : A systematic approach to the psychoanalytic treatment of narcissistic personality disorders. Int. Univ. Press New York.
- (文4) Kernberg, O. F.(1975). Borderline Conditions and Pathological Narcissism, Jason Aronson : New York.
- (文5) American Psychiatric Association, Quick Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-IV-TR.  
『DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引』(新訂版)(高橋三郎、大野裕、染矢俊幸訳) 医学書院、2005
- (文6) 坂元重 「気分障害とパーソナリティ」 東京こころのクリニック 8:77 2007
- (文7) 切替辰哉 「性格」『新版精神医学事典』435頁、弘文堂、1993
- (文8) Kretschmer, E.(1921) Körperbau und Charakter. Springer : Berlin. 9 Aufl. 1955 (相場均訳『体格と性格』、文光堂 1960)
- (文9) Schneider, K.(1923/50). Die Psychopathischen Persönlichkeiten. 1 Aufl. 9 Aufl Franz, Deuticke : Wien (懸田克躬・鰐崎 徹訳『精神病質人格』、みすず書房、1954
- (文10) Reicke, B. (八木誠一訳)「あがなひ」、『旧約・新約聖書大辞典』p33、教文館、1986
- (文11) Moltmann, J. Der Weg Jesu Christi. 『イエス・キリストの道』(J・モルトマン)組織神学論叢(3) 蓮見和男訳 445p  
新教出版社 1992
- (文12) 大野恵正、「創世記」『新共同訳・旧約聖書・略解』(監修 木田献二)所収 25p 日本基督教団出版局 2001